

タンポポ空に行く

佐藤 義隆

文学部文化情報メディア学科

(2004年9月9日受理)

Dandelions Travel into the Sky

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,
Major in Cultural Studies and Information,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

SATO Yoshitaka

(Received September 9, 2004)

<要旨>

「物が豊かになると想像力が乏しくなっていく」という言葉を聞くことがあります。想像力とは感情移入とか思いやりの心のことです。本論文では、『ドラえもん』の「タンポポ空に行く」を材料に、想像力について考えたものです。想像力の足りないのび太が、どのようにして想像力を回復させたか。また、のび太に限らず現代人が多かれ少なかれ失っている想像力をどのようにしたら回復させることができるか、等について考えたものです。

1. はじめに

「タンポポ空に行く」は、『ドラえもん全集』第18巻に載っている、不二子不二雄さんの作品です。漫画やアニメは今や日本が誇る文化の一つとして、海外でも人気が高く、大学でも漫画やアニメの研究が行われるようになりました。富山大学教育学部の横山泰行教授は、1999年から『ドラえもん学』を開講しておられますし、最近では「あしたのジョー」の千葉鉄也さんが、ある大学の漫画科の主任教授に就任されたニュースをラジオで聞きました。私も10年程前から漫画研究も始め、「文学概論」という授業で、漫画を通して文学を考える授業を行っています。その時取り上げた漫画の一つが「タンポポ空に行く」でしたので、今回、更に色々な資料を加えてまとめ

ておこうと思い、筆を執りました。この作品はアニメ化もされていて、原作と殆ど変わりありませんので、アニメ化された作品に基づいて作品鑑賞してみたいと思います。この作品を取り上げたのは、この作品には心に強く響くものがあるからです。

ところで、作品分析に入る前に、皆さんはタンポポについてどのようなイメージをお持ちでしょうか。日本では可愛いイメージでとらえられ、三浦綾子さんも、「タンポポはすがすがしくて清潔で、いいですね」とおっしゃっています。ところが、芝生の多いアメリカ等では、根も葉も大きいタンポポは芝生の大敵で、「お宅のタンポポ、早く取ってくれ」という強硬な申し入れがあるそうです。国によって受け入れ方が違うのが面白いですね。タンポポの語源について『大言海』では、

「人里の道端や土手などに生育するところから田菜（タナ）と呼び、花の後に種子の冠毛（綿毛）がほほける意味のホボが加わり、タナはタンと転化して最終的にタンポポとなった」とあります。また、柳田国男は、タンポポの花茎を短く切り、両端を裂いて水につけると、放射状に両端が反り返り、鼓の形に似てくるので、そこから鼓を打つ音タンポンと結びつけてタンポポの名が成立したと説いています。どちらにせよ、語源を辿るとタンポポの特徴がよくわかって面白いですね。

タンポポには日本種と西洋種があって、セイヨウタンポポは英語で dandelion といって、「ライオンの歯」という意味です。葉の形がライオンの歯のようにギザギザになっているところからの連想のようです。セイヨウタンポポは明治初期に札幌農学校のアメリカ人教師ブルックスによって導入されたのが最初です。また、タンポポを食べる習慣も洋の東西を問わずあって、フランス等では今も野菜として食べられていて、日本へも明治10年代に野菜として輸入されました。日本でも江戸時代には葉をゆがいてひたしものや和え物や汁の実などにして食べたそうです。ヨーロッパ全体では、タンポポの花や根を強肝、利尿、強壯などの薬として使い、根を炒って粉にしたものをコーヒーの代わりに飲んだりもしたそうです。また、綿毛を、愛される、愛されない、交互に吹いて、どちらが残るかで恋を占う遊びもヨーロッパ産です。また、綿毛の恋占いの一つに、綿毛をひと吹きして、全てなくなれば恋が成就し、少し残れば相手は浮気っぽいのでやめた方がよい、沢山残れば相手には愛する気持ちがないので諦めた方がよい、というのもあるそうです。一度試してみるのも面白いですね。「タンポポ空を行く」の最後の方で、小さな少女がタンポポの綿毛を吹いている場面がでてきますが、どんな思

いで吹いているのか想像してみるのもいいですね。中国では相手の長寿を祈って「菊枕」を作り、その習慣が日本にも伝わりましたが、中国には他にもタンポポの綿毛をつめた枕もあるそうです。

タンポポのイメージの確認が長くなりましたが、最後にアンデルセンの童話ではどんなイメージででてきているのかみてみたいと思います。アンデルセンが1855年、50歳の時に書いた童話に「ちがいがあります」というのがあります。人間の間にも違いがあるように、植物の間にも違いがあって、美しいリンゴの花もあれば、貧相なタンポポの花もある。しかし、それぞれ神様から恵みを授かっていて、同じ価値があるということが語られています。不二子不二雄さんがアンデルセン童話を精読していることは、私が前に書いた「アンデルセンの世界」で触れましたが、タンポポを取り上げてこの作品を書いたのも、アンデルセンのこの作品から受けたタンポポのイメージに触発されたものだと思います。美しいリンゴの花からみれば貧相に見えるタンポポの花、それでもけげなく、一生懸命生きている姿、それを題材にして一つの大きなドラマを作る。こうして「タンポポ空を行く」は書かれたのだと思います。それでは、「タンポポ空を行く」はどんな話なのかみていこうと思います。

2. 「タンポポ空を行く」の詳しいあらすじ

不器用なのび太は、野球をやっても、バドミントンをやってもダメで、バカにされてくさっている。家へ帰るとドラえもんが、いいものを見せてあげると言う。去年飼っていたカブトムシのケースの中で育てているタンポポをドラえもんはのび太に見せる。「なんだタンポポじゃない」と言って、感動する、様子のないのび太。ドラえもんが「すごいで

しょう」と言っても「なにが？」と言うだけののび太。「なにがって、君はこれを見て何も感じないの？」と聞いても、「別に」と応えるだけののび太に溜息をつくドラえもん。それにもめげずドラえもんは、「いいかい、このタンポポはね、きっと窓から種がこの部屋に入って来て、偶然ケースの中に落ちたんだ。そして芽を出し、ここで育ち、小さいけど蕾までつけたんだ」と解説してあげるが、「だから？」と言うだけののび太。「君はこんなところでもたくましく、けなげに生きているこの小さな命を見て、何にも感じないの？」と聞いても、「どこで生きてたって、たかがタンポポでしょ」と言うだけののび太。「そうか、口で言ってもわからないなら、ファンタグラス！」と言って、ファンタグラスを四次元ポケットから取り出すドラえもん。「これをかけてタンポポを見てごらん」と言うドラえもん。

ファンタグラスをかけると、タンポポが泣いているのが見える。「きっと日当たりも悪いし、水もなく、苦しいのだよ」と解説するドラえもん。ファンタグラスをはずすと、ただのタンポポにしか見えない。「実は、本当にタンポポが泣いているわけではなく、そう見えるだけで、これをかけると、動物も植物もみんな人間みたいに見えるんだ。つまり、絵本や童話のような、ファンタジーの世界になるんだ」とドラえもんはのび太に説明してあげる。「じゃあ、庭の隅にでも植え替えてあげるよ」とのび太が言うと、タンポポは泣きやみ、嬉しそうな顔になる。それを見て、「ああ、笑った」と喜ぶのび太。庭の隅に植えようとする、もう少し日当たりのよいところがいいと言うので、そうしてやり、水が飲みたいというので、タンポポのくせに人使いが荒いなあといいながらも水をかけてやるのび太。他の庭木達も、タンポポばかりいいな、

俺達にも飲ませてくれよと言うのでそうしてやるのび太。そうしたのび太の変化を喜びながら見守るドラえもん。

すると母さんが、「まあ珍しい。頼みもしていないのに水まきしてるなんて」と驚きながらも喜ぶ。怠け者ののび太が水まきして猫達がからかう。「雨が降るんじゃないか、もう自分で降らしてるじゃん」と言って猫達が笑う。猫達にからかわれたり笑われたりしたのび太は、怒って水まきをやめ部屋へ。そのことについてドラえもんは、「猫達がほんとうにしゃべっているわけではなく、君が心の底で思っていることが聞こえてきたのさ」と解説してやる。するとのはのび太は、「僕が僕のことをバカにするわけじゃない」とまたのはのび太はふてくされる。のはのび太をしばらくそっとしておくため、ドラえもんは部屋を出ていく。しばらくすると部屋の中を蟻達が行列を作って行き来しているのを見つけるのはのび太。ファンタグラスをかけて見ると、「怠けていると後悔するぞ。働け！働け！のはのび太のようにならないように働け！働け！」と言いながら冬に備えている蟻達の姿が見えてくる。それを見たのはのび太は、「わかったよー」と言って宿題をやり始める。母さんがそれを見て、「まあ、珍しい！自分から宿題やるなんて！のはのびちゃんなんだか別人みたい」と言う。ドラえもんはそれを聞いて満足する。

次の日、しずかちゃんとできずぎ君に、図書館へ行って勉強しないかと誘われるが、僕はいいと言って家へ帰り、タンポポや庭木達に水をやるのはのび太。「蕾が膨らんできたね」「いつもおいしいお水をくれるのはのび太さんのおかげよ。」のはのび太とタンポポが楽しく話しているときジャイアンとスネ夫が野球の誘いに来る。「行かない。どうせ失敗したら、どなったり、バカにしたりするんだから」と言うと、「それはいけないわ」と言うのはのび太

をたしなめるタンポポ。「どなられたり、バカにされたりするのが悔しかったらがんばって練習すればいいじゃない。苦手ならなおさらぶつかっていかなきゃ。」それを聞いたのび太は、「うるさい！タンポポのくせに生意気言うと面倒みてやらないぞ！」と怒って行ってしまふ。その夜嵐が来て、タンポポが助けを呼んでいる声が聞こえてくる。「助けて！ちぎれちゃう！」のび太はすぐに庭へ行き、プラスチック製の大きなバケツをかぶせて嵐がやむまでおさえてやる。それを二階から見ているドラえもんは満足の笑みを浮かべる。

やがてタンポポはきれいな花を咲かせる。「のび太さんのおかげよ」とまた礼を言うタンポポ。「そんなことないよ」と照れるのび太。「こんないい場所に植えて頂いて、毎日おいしいお水をもらい、嵐から守ってくれてのび太さんはほんとうに優しくて、頼もしい男の子だわ。」「そんなこと言われたの生まれて初めてだよ。君と話している時が一番楽しいよ。」それを見ていた母さんは、「この頃よく庭で独り言言っているけど大丈夫かしら」と心配する。ドラえもんは笑ってごまかす。しかしドラえもんも少し心配になってきて、「ねえ、のび太君、タンポポと仲良くするのもいいけどさ、たまにはジャイアン達と野球でもしたら」と勧める。しかし、のび太は今タンポポのことで頭が一杯で、ドラえもんの勧めにも応じず、ジャイアン達の野球の誘いをまた断る。「なんでこの頃あいつ付き合い悪いんだ」とジャイアンが言う。「大丈夫。そのうちもとに戻るから」と言うドラえもん。そして、のび太の代わりにドラえもんが野球に行く。

そうして時が経ち、とうとうタンポポは綿帽子になる。「これから私の子供達は旅に出るのよ。私のがのび太さんのお部屋へ辿りつ

いたような長い長い旅に出るのよ」とタンポポは子供達の旅立ちのことをのび太に話す。のび太も感動して、「子供達が一人立ちして、広い世界へ飛び出して行ってきれいな花を咲かせるんだね」と言う。そして風によって子供達はみんな飛び立っていく。しかし、一人だけ意気地なしが残っていて、タンポポのママを困らせている。「行きたくないよ。ママと一緒にいたいよ。」「勇気を出さないよ。みんなにできることがどうしてできないの。」タンポポのママは子供に勇気を出させるために、自分がここまで旅してやってきた話しをしてあげる。「ママも風に乗って飛んできたのよ。」「ママのママってどこにいたの。」「遠い遠い山奥の小さな小さな駅のそばよ。ある晴れた日、沢山のきょうだいしまい達と一緒に飛び立ったのよ。」「こわくなかった？」「ううん、ちっとも。初めて見る広い世界が楽しみだったわ。疲れると列車の屋根に降りてごとごとと揺られながらお昼ねしたの。夜になるとちょっぴり淋しくなって泣いたけど、お月様が慰めてくれたわ。そしてこの町に着いて、のび太さんのお部屋に飛び込んだの。」「ママ 旅をしてよかったと思う？」「もちろんよ。そのおかげでのび太さんと出会えて、きれいな花も咲かせたし、坊や達も生まれたんですもの。」こうして次の日、残っていた一人も勇気を出して旅立っていった。その子が無事に旅していることをタケコプターで確かめたのび太は、戻ってきて、自分も勇気を出して野球をやろうと思う。

3. ファンタグラス

「タンポポ空に行く」では、ファンタグラスを通して、植物にも心があることをのび太に示し、草一本、虫一匹でも愛する心を失ってはいけないと諭します。そのようにすれば自然と心が通いあって、心豊かな人間になれる

ると教えます。ファンタグラスとは、fantasy-glass のことで、それをかけると、絵本や童話のようなファンタジーの世界を見せてくれるものです。ファンタグラスのような工夫としては、メーテルリンクの『青い鳥』に出てくるダイヤ付きの帽子がありますね。これを右から左へ回すと、今まで見えなかったものの本当の姿が見えてきたり、聞こえてきたりするというものです。また、「邯鄲の夢」を見せてくれた不思議な枕も、ドラえもんの四次元ポケットから出てくる秘密の道具のようなもので、それによって盧生は、人の世の栄枯盛衰の儚さを知ることができましたね。どこの国にも、こうした秘密の道具で人生の真実を示そうとする工夫があるところが面白いですね。Fantasy という英語は、ギリシャ語の phantasia からきていて、「見えるようにする」という意味を持っています。だから、人間の心や動植物の心とか、宗教的世界観のような目に見えないものを目に見えるようにするのが fantasy という言葉の意味なのです。

植物にも心があるということを理解することは中々難しいことですが、そうしたことを伝えている文章を読んだり、映画等を見てみると、確かにそうだなあと思えてきます。例えば、『ガイアシンフォニー』という映画があります。ガイアとはギリシャ神話の母なる大地のことですが、その大地、つまり地球はそれ自体が大きな生命体であって、その中の全ての生命、空気、水、土等も含めて全てが有機的につながって生きていて、そうやって、音楽で例えれば、シンフォニー（交響曲）を奏でているんだということを伝えようとしているのがこの映画なのです。

この映画の中に出てくる話の一つに、トマトと心を通わせて、一粒のトマトの種から遺伝子操作も、特殊肥料も使わずに、1万3千個も実のなるトマトの巨木を育てた野沢重雄

さんの話があります。野沢さんの話では、何かを育てるときに一番大切なのは、育てている人の心だといえます。トマトも心を持っているので、トマトに語りかけ、いくらでも大きくなっていいんだよと言って励ますことだそうです。そうすると、トマトと心が通いあって、トマトはどんどん育っていくそうです。皆さんも家で何かを育てておられたら、語りかけてやったらいかがでしょうか。きっと新たな関係になれると思います。のび太は『ガイアシンフォニー』を多分見ていないでしょうから、ドラえもんは、ファンタグラスという奥の手を使っのび太に植物の心を見せたということでしょうね。ちなみに、このファンタグラスのもとになったものもアンデルセンの『ホメルン運河からアマゲル島東端までの徒歩旅行』や「うまいおもいつき」に出てくる不思議なメガネだと思うのですが、このことについては先にあげた「アンデルセンの世界」に詳しく書いてあります。

4. 教育者ドラえもん

のび太の変化を喜びながら見守るドラえもんは、子供の内面にある潜在力を、子供が自分で引き出すのを手助けする教育者の役割を演じています。「教育」とはそもそもどういうことを意味しているのでしょうか。中国の『説文解字』では、「教」とは大人が子供に模範とされるものを伝承し、それを学習させることであり、「育」とは子供を養って善をなさしめること、と定義しています。英語で教育は education ですが、語源を調べると、ラテン語の educatio からきていることがわかります。これの動詞形には二つあって、一つは educare（教え込む）で、もう一つは educere（引き出す）です。educare は、人類の文化遺産や慣習、法律、道徳等を教え込み、理想的な人間像に似せて子供を育てていくことで

す。educere は、人の内面にあるものを引き出す手助けをすることです。ドイツの教育者ウイルマンは、「教育の本質は文化と社会の関わりや、精神的諸財を次世代へ伝達すること」と言っていますので、彼は educare 派といえますし、スイスの教育者ペスタロッチは、「教育は子供が自分で内面的諸力を形成するよう手助けすること」と言っていますので、彼は educere 派といえます。しかし、教育全体にとっては、この両面は車の両輪のように必要なものであり、この二面のバランスをとって行っていくのが理想だと思います。

ここではドラえもんは educere 派の教育者の役割を担っていて、のび太から、のび太の持っている潜在力を引き出そうとしています。ここでいう潜在力とは、植物の心を知ることのできる心の働きのことですね。そうした心の働きのことを想像力 (imagination) といいます。想像力とは、わかりやすくいえば、思いやりの心ということですが、他の表現で少し長くいえば、色々なものに感情移入させて、感じたり、考えたりすることのできる力のことですし、世界の美しさやいとおしさ、悲惨さ等に敏感に反応できる力のことです。ドラえもんは、ファンタグラスを通して、のび太自身の内面にあって、深く眠っている想像力を引き出す手助けをしたのです。

5. ファンタグラスを通して見えたり、聞こえたりしたものの正体

ファンタグラスを通してのび太が見たり聞いたりしたものの正体は何だったのでしょうか。それは全てのび太の内面の声でした。ドラえもんはそのようにのび太に解説しています。猫達のからかいや笑いは、自分自身が心の底で思っていることであり、蟻達がのび太のことを怠け者の代表としてとらえていることも、全てのび太自身の内面の声だと教え

ます。野球やっててどなられたり、バカにされたりするのがくやしかったら、がんばって練習すればいいじゃないというタンポポの言葉も、自分が内面で思っていることであるわけです。本当は自分自身でも、そうした怠け癖や頑張りのなさのことを嫌っている面があるのだけれど、つまり自己嫌悪している面があるのだけれど、それも心の奥深くにしまいこんで、それに触れないようにしていたのに、ファンタグラスを通して、そうした自分の内面を見せられたために、怒ったり、ふてくされたりしたのです。

しかし、蟻達の言葉に泣き出しながらも、反省して、自分から宿題をやりだしたことは、人は反省して努力すれば、別人になれることを示しています。自分自身の弱さから逃げないで、弱い自分と向き合えば、自分が変わるということを示しています。こうしたのび太は、ファンタグラスを通して自分の心の奥深くに眠っていた想像力を引き出し、植物にも心があることを知ったり、自分の弱点を認めて反省し、自分を変える努力をしたりして、一人残ったタンポポの子供を見送ったあと、自分を反省して、自分の弱さの克服へと勇気を出して踏み出す決心をしたのです。

6. 想像力 (imagination) が創造力 (creativity) を生む

Necessity is the mother of invention (必要は発明の母) という諺があります。大体において便利な機械、病気に効く薬等の発明・発見は人々への想像力 (愛) から生まれたとってよいでしょう。だから、想像力が創造力を生むということになります。創造力というと、機械の発明や特効薬の開発、それに偉大な芸術作品の創造等が頭に浮かびますが、もっと身近な例もあります。例えば、お年寄りや体

に障害のある人々に想像力を働かせてバリア・フリーのものを作るとか、両親に感謝して家の手伝いをするとか、先生や同級生のことを考えて授業中私語をしないと、のび太のように植物に想像力を働かせて自分から水やりをするとかは、別人の創造になるわけです。

のび太はファンタグラスをかけた(想像力を取り戻した)おかげで、植物の心を知り、弱い自分にも立ち向かう勇気を得ましたが、ファンタグラスがなかったら(想像力を取り戻せなかったら)現代人全体ものび太状態なのではないでしょうか。ここしばらく人類は物質的豊かさや便利さだけを追求する価値観から、自己中心的になっている状態が続いているように思われます。それが自分達をも含めた生命全体への想像力の喪失につながり、自然破壊、環境破壊が進み、モラルの低下、暴行や殺人の横行、自殺の増加となっているように思われます。

7. 想像力回復策

以上のような現代の悲惨な状況の原因は、想像力の欠如であることが見えてきましたので、想像力を回復させるにはどうしたらよいかを考えてみたいと思います。結論から先にいえば、方法は二つあると思います。一つは想像力を培ってくれるものを五感で味わうこと。もう一つは、想像力を潤れさせるもののできる限り近づかないこと、だと思えます。以上の二つを少し詳しくみてみたいと思います。

想像力を培ってくれるものを五感で味わう

1. 視覚

視覚の点からいけば、自然観察、芸術品鑑賞、映像観賞等があげられます。「タンポポ空を行く」等をアニメで見たり、漫画で読んだりすることもその一つですね。また、京都造形芸術大学教授の千住博氏は、NHK 人間

講座『美の誕生』の中で、一貫して「想像力」をテーマに話しをして下さいました。美しいものを見て、美しいと感じる心が想像力であり、それを人々に伝え、共有するために、人類は様々に表現してきました。そして、美しいと感じる心が人を育てたのです。私達は美しいものを見たときにはっとすることがありますが、それは本当の自分を思い出したからだと言えます。今自分がしていることは美しいといえるだろうか。美は自分を反省させ、本当の自分に気づかせてくれます。最初の人類が花を見て美しいと感じた心が私達の心の中にも流れています。尊敬と畏敬の念で自然と接した古代人の豊かな想像力も私達は受け継いでいます。しかし、近年、想像力に重きをおかなくなった時代がずっと続いてきました。21世紀は失われた想像力の回復こそが急務であると千住氏はしめくくっておられます。

2. 聴覚

聴覚の点でいうと、自然の音に耳を傾け、心に響く音楽を聴くことがあげられますね。NHKの大河ドラマ『宮本武蔵』の中に、柳生石舟斎が武蔵に言った、「鳥の声をきき、風の音に耳を傾ける」ということばがありました。鳥の声や風の音だけでなく、自然界には様々な音があります。滝の流れる音、小川のせせらぎ、虫の鳴き声、そういうものを通して何かを悟ったり、美しいと思えたらしめたものです。想像力の回復もまじかです。余談ですが、歌手の南こうせつさんの音楽の原点は読経と木魚だそうです。南さんは大分県のお寺の息子さんで、小さい頃からお父さんについて檀家まわりをして、読経と木魚のリズムが身にしみて、そのリズムから歌の道が開けていったそうです。

音楽といえはすぐに頭に浮かぶのがモーツァルトですが、彼の音楽は体内リズムと通

じるものがある、その結果安らげるので、人にも動物にもいい効果があると言われていいます。だから人が彼の音楽を聞くと知能指数が上がり、自律神経は覚醒し、トマトに聞かせると甘味を増し、牛に聞かせると乳の出がよくなり、質も高くなるといいます。体の調子がよくなると、それに比例して想像力も高まってくると思います。モーツァルト以外のクラシック音楽も勿論効果あると思います。

また昨年は韓流で、韓国のドラマが大人気でしたが、その中で歌われていた歌も純愛がテーマでしたので、その音楽を聴くことによって優しい気持ちが戻り、お姑さんに優しく接することができるようになったというファックスが読み上げられたことがありました。

聴覚関係の面白い関連事項としては、観音様という仏様のことを考えてみようと思います。「音を観る」と書いてあります。観音様は、民の苦しむ声を聞いただけで、その苦しむ姿を観て、救済にかけつけて下さるありがたい仏様故に民衆に大変人気のある仏様です。この仏様の名には、この仏様の想像力の豊かさがこめられています。

3. 味覚

味覚の点からいうと、slow foodのようなおいしい食べ物を食べることがあげられます。slow foodの対極にあるfast foodは、時代の要請に応じて出現しました。現代は全ての分野においてspeedがものをいう時代です。仕事もはやくできる人が役に立ち、旅行も一分でもはやくいけるものが喜ばれます。クイズ番組を見ていると、思考もはやさが求められることがわかります。何かにつけてテンポがはやく、忙しい現代人にぴったりマッチした食形態がfast foodですね。現代は“eat and run society”(食べたらずく走り出す社会)といわれています。fast food レストランであ

わたくし食べ物をつめこんで飛び出していく現代人の忙しい生活を表現したものです。それに対して、slow foodというのは、急ぎ足の生活が慣習や文化を崩壊させつつあることに危機感を感じて、郷土料理の風味と豊かさを再発見する運動としてイタリアで起こり、世界中にその波が広がっています。良い食生活が精神・肉体両面の健康を増進させるという考えにたっています。

手間ひま掛けて作るのがslow foodですね。日本の人間国宝にあたる「フランス国家最優秀料理人(M.O.F.)のジャック・ポリーさんは、子供の頃おばあさんが作ってくれたslow food「若鶏のロティ(若鶏をオーブンで焼いたもの)」が料理人の原点だと言っておられます。こうしたおいしいslow foodをおばあさんに作ってもらったのがきっかけで、14歳で料理人の道へ進み、現在の地位に至ったのです。そして、自分の最後の晩餐には、この「若鶏のロティ」を食べたいと言っておられます。おばあさんの愛情こもった料理がポリーさんをM.O.F.にしたといえますね。

NHKの朝の連続小説『ほんまもん』は、高校3年になってもまだ進路が決まっていない山中木葉が、おばあさんが死ぬ前に、父の作った茶粥と焼き鮎を実にうまそうに食べて死んでいったのを見て、料理人になることを考えます。そして尼寺で、言葉ではいえないおいしいごま豆腐に出会い、尼さんのもとで料理の修業をさせていただきます。ここのごま豆腐がなぜおいしいかというと、手間ひま掛けて作っているからです。前の晩から白ごまを水で冷やしておき、客の来る時間に合わせて擂鉢でよく擂って布で濾し、葛粉を入れて長く練り、それを冷やして固める。尼さんは、木葉に料理の極意を教えます。料理の極意とは料理を作ることを通して、食材の命をいかし、自分が生かされていることを実感すること。

米も野菜もほっておけば腐る。食材の命も自分の命と同じように大切に最大限にいかす。材料は全て使い切り、感謝して全て頂く。一服のお茶にもお茶の命があって、あなたの口に入るまでには大勢の人の手間が掛かっているんだということに思いを馳せる。何事にもそういう感謝の気持ちを持っていけば、人は前向きに生きていける、と尼さんは木葉に教えます。

この他にも、辻口博啓さんのような有名なパティシエの作ったケーキ類や日本の伝統的な和菓子職人の作った和菓子等を食べるのもいいですね。これらの、手間ひま掛けて、愛情込めて作られたものを食べていると、尼さんが木葉に教えてくれたことに思いがいて、想像力が湧いてくると思います。日本では食事のときに「いただきます」と言い、食べ終わったら「ごちそうさま」と言いますが、「いただきます」は「あなたの命を私の命にさせていただきます」の略ですし、「ごちそうさま」はこの料理を作るために馳走（走り回る）してくれた人への感謝の気持ちですから、この言葉は両者への想像力がなかったら生まれなかった言葉ですね。日本語にはこうした素晴らしい言葉があることを誇りに思います。

4. 嗅覚

よいにおいをかぐと、血圧は下降し、緊張がほぐれます。よい香りへの憧れは紀元前3000年のエジプトやギリシャに既にみられ、それ以降様々な香水が開発され、男女を問わず使われています。香木を焚き、その香りを鑑賞することによって、人間形成を図る情操教育の一分野に「香道」があります。このように、よいにおい・香りへの憧れはずっと昔からあるのですが、よいにおい・香りの原点はやはり自然の中にあると思います。

花の香り、草のにおい、果物の香り等、自

然の中の良い香りを吸うと、気分が爽快になるだけでなく、色々なことに想像力が広がっていきます。『百人一首』の紀貫之の歌に、

人はいさ 心もしらず ふるさとは

花ぞ昔の 香にほひける

というのがありますが、これは、人の心は移ろいやすいが、自然の美しさは昔と変わらぬという内容のもので、美しくおい咲く梅の花に触れて、自然の本質や癒す力に思いを馳せています。

5. 触覚

触覚もやはり自然に触れるのが一番だと思います。大木に触れると、自然の持つ生命力のようなものが伝わってきて、自分の命により影響を与えてくれると思います。最近では、ピオ・トープという考え方が浸透してきています。ピオ・トープはドイツ語で、「生きものの住む場所」という意味で、幼稚園や小学校それに公園や空き地等に作られる小さな自然のことで、虫が怖くて触れなかった子供達が、生き物大好きになり、蟻がいるだけで公園へ行かなかった子が、進んで行くようになっていたりしています。生き物と触れ合うようになってから家でも変わり、ダンゴムシを拾ってもち帰り、蝶を追いかける生活に変わりました。

ピオ・トープを作って最初の頃は、自分の思い通りにしようとして、虫をつぶしたり、踏みつけたりした子もいたそうですが、そのうち、葉っぱをあげると喜ぶからあげようとか、その生き物にとってどのように暮らしたらいいのかを考えるようになったといいます。また、自然の中に遊びや楽しみを見つけられるようになり、自然から色々なことを学ぶようにもなりました。小さな命に触れることで、すぐ近くにいる人を思いやれるようもなってきました。自然に触れると、自分の心も開けるし、人への関わり方も身につきます。

生き物に心をかけられるようになると、友達にもこうすると喜んでくれるだろうなと思えるようになるといいます。

②想像力を涸らしてしまうものに近づかない
想像力回復策のもう一つは、想像力を涸らしてしまうものにできるだけ近づかないことが考えられます。ゲームや遊びやバラエティ番組等いくつか例はありますが、そういうものに多くの時間を割かないようにすることが大事だと思います。私達はストレスが溜まりますから、ストレス解消にゲームも遊びもバラエティ番組も必要ですが、度を越さないように気をつけた方がよいということですね。こうしたものにあまりに時間を割きすぎると、五感を使って想像力を回復させることに使う時間がなくなり、結果的に想像力の枯渇した人間になってしまうのではないかと思います。

8. 終わりに

「タンポポ空を行く」を通して、想像力のことについて考えてきましたが、岩手県浄法寺町の天台寺の住職瀬戸内寂聴さんも、色々なところで「想像力の大切さ」を説いておられます。恒例の天台寺の法話でも、集まった

1万2千人の参拝者を前に、「想像力の大切さ」を説かれました。「もともと苦しみと矛盾に満ちているのが人生であり、それを生き、他人の苦しみに思いを馳せるために必要なのが想像力です」と語り、想像力を鍛える最適な方法として読書をあげておられます。

「想像力を培ってくれるものを五感で味わう」ことを一つ一つ別々に実践することは大変でしょうから、読書なら、自分の読み方次第で、一冊の本で五感全てを使って想像力を鍛えることができますと思います。読書を中心に、個々に五感で味わう方も併せてやっていたら、かなりの想像力が蘇ってくると思います。また、これは余談ですが、英語教授法に「ドラマメソッド」というのがありまして、これは五感・感情・想像力をフルに使って学ぶ英語学習法で、幼児から大人までクラスがあって、頭・体・心を総動員して、自分の意思や感情を込めて学習できるので、楽しみながらより深く英語が定着すると評判の学習法です。英語学習にも五感と想像力が重要なものとして認識されていることがわかります。想像力のことについて長々と書いてきましたが、最後までお読み頂き、ありがとうございました。